あるいの海馬
～見落としていた蛍を探して～

小倉紫川沿いには、城下町としてのアイデンティティと世界的工業都市として日本を支えた、異なる性質の過去がある。そうした流れの中には断ち切ることを余儀なくされた、あるいはあり得た文化の芽もあった。紫川には蛍をはじめとする多様な植生が存在する。そうしたまちを取り巻く自然や文化を踏まえて再度まちにあった骨格とその流れを受けた新しくも地域にそぐう骨格とはなんなのか、100 年後の未来とともに考える

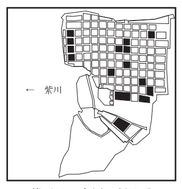
1. 歴史的背景

紫川を利用した水運

現在の紫川

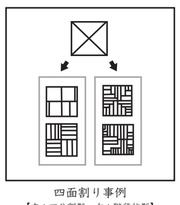
水上のバラック建築

敷地周辺は、城下町として発達した都市であり、紫川は水運の中心であった。1940年代には渡日してきた韓国の方々が住まっていた。水上には無数のバラック建築が立ち並び、紫川沿いに集落のように簡易建築郡が形成されていた。1970年代には都市景観への悪影響などが懸念され、撤去される運びとなった。
現在の紫川は、市全体で水質改善に積極的に取り組んでおり、小倉の都市のシンボルとなっている。
このように、小倉は紫川と共に生き続けている都市である。



紫川沿い東側町割略図
【塗り潰し：四面割り分布】

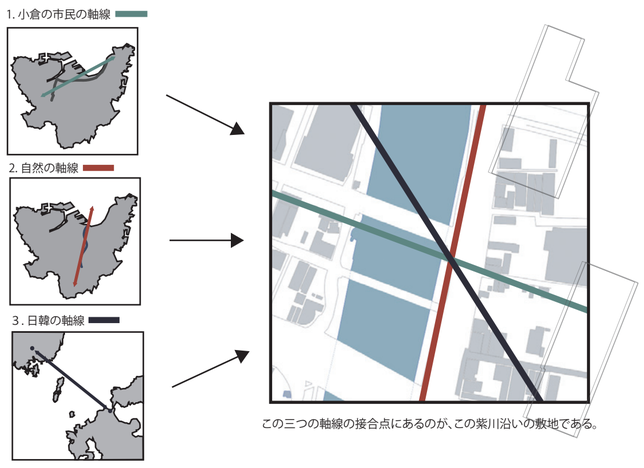
敷地周辺航空写真：昭和 30 年代以降


四面割り事例
【左：四分割型　右：階段状型】

紫川沿いに発達した城下町の特徴として、街区の寸法が近世城下町の中でも最小のモジュールであることが挙げられる。基盤型の類型は，ヨコ型が65%、タテ型と四面型はともに2割弱という比率でヨコ背割二列型を計画の基調としていることが分かる。紫川沿いなどの人の流動が多い町は、四面割りの町となった 。端的にいうと、対象の敷地とする敷地は城下町のなかでは細やかな地割りがなされており、東西、南北を軸に土地のどの面に人通りが多いかによって二面割りや四面割に発達していった。

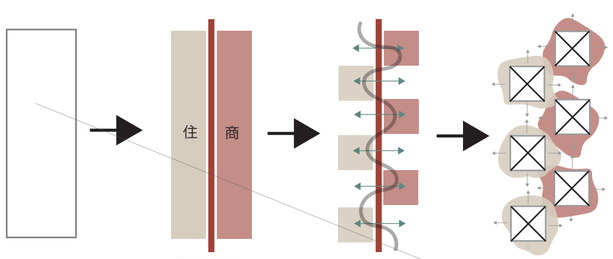
2. ダイアグラム

現在敷地周辺には、かつて行われていた川辺での鵜飼の歴史など城下町としてのアイデンティティをまちに再度取り込もうとしていることが窺える。こうした目に見える街の意向が現れた敷地周辺にて、再度まちにあった骨格と、その流れを受けた新しくも地域にそぐう骨格とはなんなのか考える。



この三つの軸線の接合点にあるのが、この紫川沿いの敷地である。

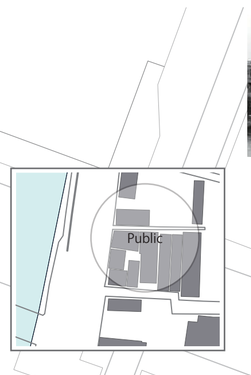
この敷地には3つの軸線がある。
一つ目が、歴史を踏まえた長崎街道に沿った「小倉の市民の軸線」、二つ目が小倉の土地をつくり、荷物の運輸など小倉の産業を支えている紫川の「自然の軸線」、三つ目は、かつて、そして現在もつながりのある韓国との「日韓の軸線」。
これら三つの軸線により、過去から現在までの様々なファサードを持つ「小倉」という都市を形成していった。そして、この三つの軸線の接合点にあるのが、この紫川沿いの敷地である



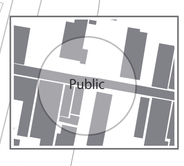
自然の軸線から住と商でエリアが分かれる。
長崎街道といった小倉の市民の軸線「動き」で自然の軸線に絡あむ。
小倉市特有の「四面割り」を行う。閉じていた空間が広がり空間が曖昧になる。

紫川の軸線よりかつて2面性を持っていたこの敷地に則して、住と商を分ける。
その後「市民の軸線」より、人が動くことにより住と商が絡まりだす。
そして小倉の四面割を行うことでより空間が広がる。向かい合うことがなかった空間同士がつながり、境界が曖昧になる。

100年後住や商、そして人間以外の動植物が侵食しやくすくなり、小倉の時代の変化に合わせた多様なファサードを持つ骨格が生まれる。



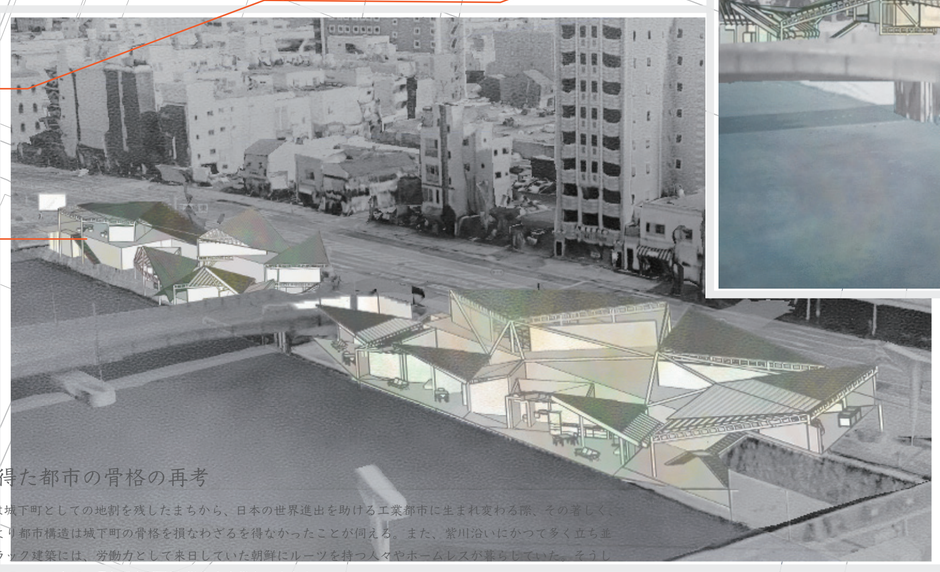
■外国人の変化
入国制限が解除され、一度止まっていた外国人居住者が増加していく。
日韓の軸線に乗り、韓国だけでなくアジア諸国から多くのものが住み始める。
彼らを向かい入れるため広げている商の骨格が拡張し、次第に住も増え始める。
既存の小倉市民の商のエリアに絡まることで、より開いたものとなる

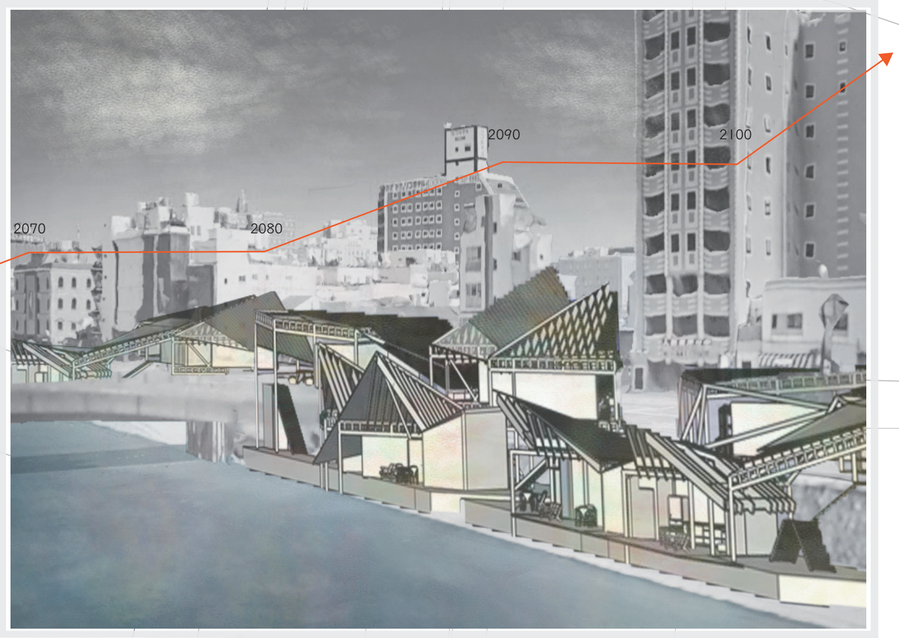


■都市の変化
小倉の中心商店街として発展したアーケードには、老舗店が次第に消えていき、次々と都市の余白が生まれる。モータリゼーションや少子高齢化などで、小倉のかつての都市が消えていく中、市民が小倉を残そうという意思と共に骨格が拡張する。

2050　2060

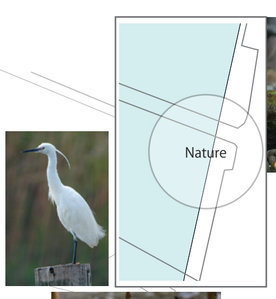
2030

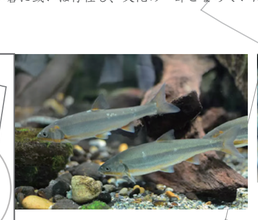


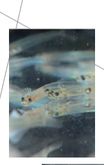


或いはあり得た都市の骨格の再考

過去より、小倉には城下町としての地割を残したまちから、日本の世界進出を助ける工業都市に生まれ変わる際、その著しく、急を要する進化により都市構造は城下町の骨格を損なわざるを得なかったことが伺える。また、紫川沿いにかつて多く立ち並んでいた水上のバラック建築には、労働力として来日していた朝鮮ルーツを持つ人々やホームレスが暮らしていた。そうした一つの暮らしのスタイルは水辺の景観的観点から撤去を余儀なくされた。
この二つの事実を踏まえて、小倉に或いは存在し、文化の一部となっていたかもしれない都市の骨格を提案し、新たな都市の海馬を形成する。

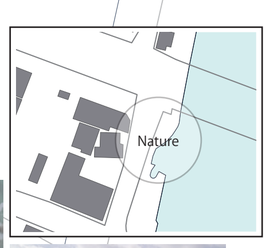






■川と自然の関わり
小倉市民の力で、かつて荒れ果てていた紫川には生物が戻ってくる。人の素晴らしさと同時に、自然がもつ力の凄さを川辺の空間で暮らすことで体感することができる

■川の生物
・シロウオ
・アユ
・コサギ
・シロウオ

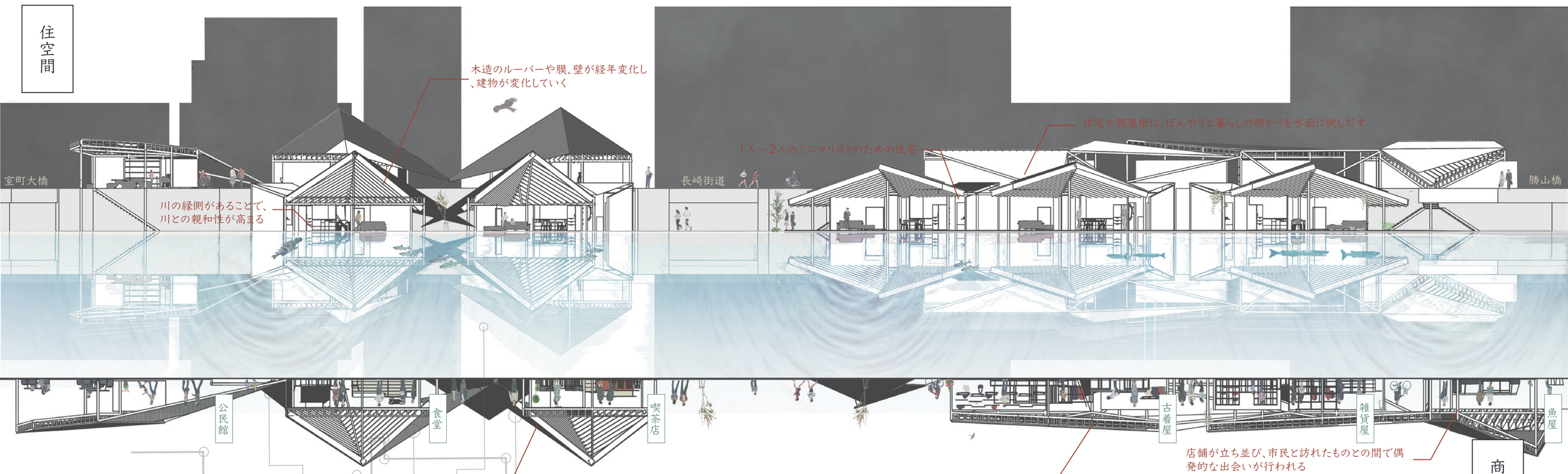


■植物の変化
川辺の小倉の住人が作った緑に変化が現れる。外国人と共に移動してきた植物たちが加わる。
例えば、韓国のナツメグが街路木として、庭の木として生え始める。ナツメグの身を食べた鳥や虫たちが種をさらに飛ばし、川辺の緑にも現れる。
また古来種のオギ群層が人がいなくなったエリアにも拡張する。
生物が身を休めるエリアが増え、人のエリアに、動物が入り始める。

■植物
・ナツメグ
・チョウセンアサガオ
・オギ
・ウラギク

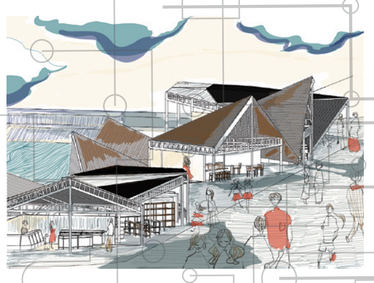
■既存の住の変化
多くの長屋が立ち並ぶこのエリアは人口減少と共に、空き家が増加していく。しかし、都市一極化で集まった新たな市民の住のエリアとなり、空き家となった都市の余白に海馬が拡張する。
かつて人が育てていた植物たちは、自由に伸び伸びと成長を遂げ、住のエリアへと侵食していく。
人・動物・植物が伸び伸びと過ごすエリアに。全ての生物が互いに助け合える。

3. 住と商の空間

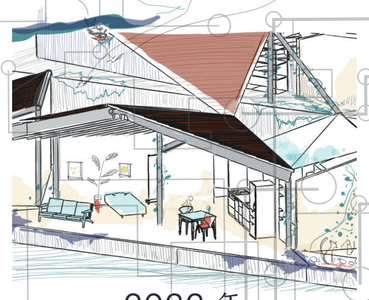


4. 小倉の１００年ストーリー

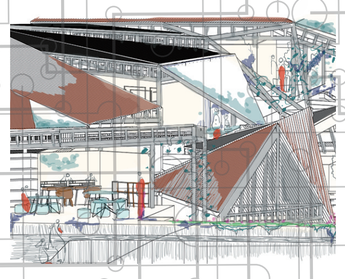
商「出会いある川辺にて」



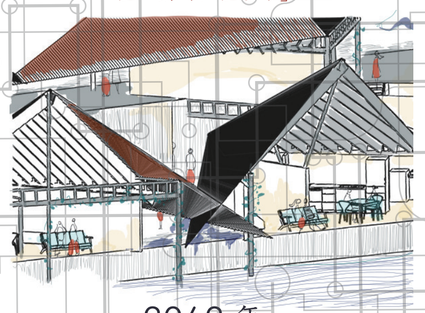
住「川面に親しむ生活」


2022 年

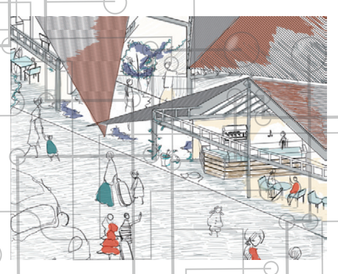
商「流れを受け入れる都市」



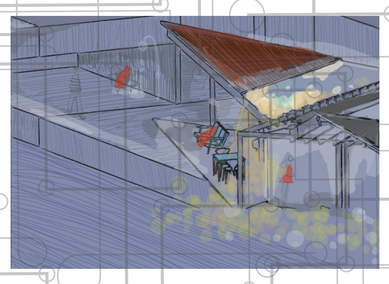
住「動的に住まう」


2042 年

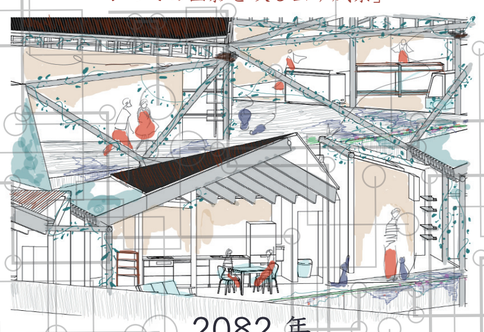
商「侵食される都市」



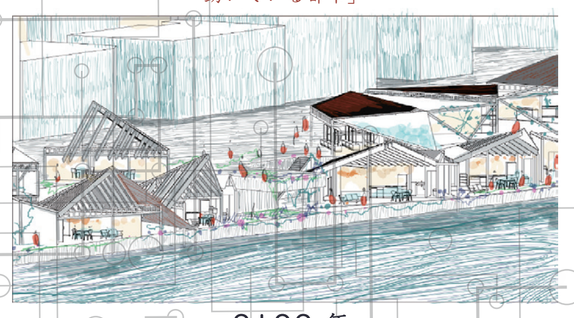
住「川辺に灯るあかり」


2062 年

「かつての面影を映し出す風景」


2082 年

「動いている都市」


2102 年